

牧草とソイリング

田 垣 住 雄

飼料作物が、裏作または輪作としてその栽培が盛んになつてきたこととを考へますと、この飼料作物の中にソイリング効果のあるもの(牧草)とソイリング効果のないもの(牧草以外の飼料作物)とを混同せぬ様留意したいものである。『飼料作物という目標では同じであるとしても、ソイリング効果としては甚だ違つているのでこの点配慮しなければならぬ』と云う田垣氏の御意見を本誌編集部に御寄せ下さいましたので、ここに掲載することといたしました。(編集部)

だが、これをさらに有効にするため牧草作を併進する道が開けてから、いままでも利用し得なかつた寒冷、傾斜地帯や不良、不毛の地域まで営農が伸張してきた。このようにして、土壌を作りあげ、糞尿肥、堆肥などを添用し、土壌微生物群や腐植土の多い土壌で、作物を栽培し、つとめて生草食で養畜することをソイリングといつて、このソイルに立脚した自主性の高い農家のことをフオームといつて、その職業人をフオーマーといつてゐる。

営農の發展は土地を肥やして良い作物、良い家畜をふやす以外には道がない。ところが作物を多産し、家畜を多養すると、耕地も草地も痩せてくるから、これを防ぐために多肥しなければならぬ。そこで、肥料を補うために購買肥料を多用し、また飼料不足を補うために購買飼料を多用することによつて維持を図るが、このため肥料代や飼料代がかさんで、不作の年にはそれさえ支払えぬような結果に陥つて、これが負債の累積になつて貧乏百姓に転落する。このような自主性の乏しい農家のことをベザントといつてゐる。

化学肥料だけを多用しても耕地の地力が衰へ、また金もかかるので、つとめてこれを節約するため、先ず草地を培養して草生を向上し、自給飼肥料を増産する道が工夫せられ、また、化学肥料効果と自給肥料効果とを併用して生産性を向上する道が進ん

つて、ソイルフオーミングこそ、眞の農家の姿であつて、ソイリング Soiling することが営農の健全化である。

日本農家の大部がベザントであるから、その開拓成果も、営農成果もあがらず、働いても働いても貧乏から脱け切れない姿を持ち、農政もこのベザント対策が主体であるから、自主性のない百姓を救済、補助、融資することが本態で、貧困政策に追われている。そこで、どうしてもベザントからフオーマーに躍進しなければ、この不健全な姿から健全な姿に立ち上ることができない。そこに営農転換の政策が採られ、酪農振興が提唱せられてゐるのであるが、従来酪農推進振りを見ると、たんに乳産を目標とするだけで酪農振興は依然としてベザントであつて、ベザント酪農の貧乏を繰返しているに過ぎないか、あるいはさらに貧乏に拍車をかけてゐるような姿であるから、自主性が乏しくソイリングが不振で、酪農になつても救済保護に頼るような破目に陥つてゐる。

日本農業転換のため緊急な酪農政策は、こんなベザント酪農でなく、ソイリングによつてフオームを完成するフオーム酪農を目標とするのであるから、ベザント農法からフオーム農法に切り換へることが要訣なのである。換言するとベザント農政からフオーム農政に切り換え、百姓のベザント気分を健全なフオーム気分風に切り換えて、もつと自主的な姿を打ち出すことである。

ソイリングでは牧草作の導入が動機になつて、地上部(葉茎)が草産効果、地下部

(根系)が土壌効果をあげるところに、生物学的なソイル改良の経済効果があるのである。従つて、既耕地の地力維持に短期牧草作、耕地外の未利用地に長期牧草作を導入せられると、はじめてソイリングによつてフオーマーへの道が開けるのである。

穀菽農はベザントに陥る傾向を持つので、これに牧草作を加ふることがフオーマーの道になつてゐる。むしろ牧草作に重点を置くとき、傾斜地、不良地にも發展するので、これらの地帯では牧草作が主作物で穀菽作が副作物というような考え方が生ずる。

米作主体の日本農業は良地をすべて水田にしてゐるので、水田が畑よりも広いが、畑作に牧草作を加ふると畑地はまだまだほとんど増反することが出来る。田分農業の零細化から畑作振興の新農林政策が打ち出されたことは、従来通りのベザント式畑造りでなく、新しいフオーム式畑作りであることを深く認識して、水田作に劣らないような牧草作を推進し、零細化と衰退化とをソイリングによつて打開しなければならぬ。たとへば牧草作や草生改良を進めても、その地上部をベザント式に掠奪したのではソイリング効果を削ぐので、その越冬被覆効果や地下部根系効果を充分に發揮させるような草地管理を重視し、年産効果だけでなく永年効果をねらつて、長期な目標で、じっくりと根気強く転換の道を歩まねばならぬ。(筆者は、札幌市在住、草地農学特許に草資源の改良造成並びに利用増進の方策について権威ある研究家でありませぬ。)